

2024



新クトゥルフ神話TRPG

シナリオコンテスト2024 大賞作

深淵の星

1930年代アーカム、友人から寄せられた依頼の裏には闇に囁くものの影があった。

若森 仁

イラスト：那知上陽子

概要

探索者のもとに友人エドワードから届いた小包には、彼の父の遺品である奇妙な円盤と、その調査を依頼したいという手紙が入っていた。

探索者の調査は円盤の持つ秘密を明らかにしていく。それは、ヴァーモント州に潜むユゴスよりのものの存在と、彼らの恐るべき地球植民地化のもくろみであった。そして同時に、探索者の周囲にはユゴスよりのものが送り込んだ手勢の影が忍び寄る。

地球とユゴスをつなげる時空の門を、ヴァーモント州のブラック・マウンテンに開こうとしているユゴスよりのものたちは、この計画を察知されることを恐れ、探索者への妨害工作を開始したのだ。

円盤はユゴスからの思念波を受信しており、これが地球上に存在するかぎり、時空の門は完成へと近づいていく。探索者はヴァーモント州へと赴き、すでに開きかけている時空の門から円盤を地球外に放出し、門の完成を阻止しなければならない。

1930年、アーカム。探索者は友人から届いた奇妙な物品を調べる中で、ヴァーモント州に潜む怪物的な存在とそのたくらみを知ることとなる。渦中に放り込まれた探索者は、自らと人類に忍び寄る影を払い除けるために行動を起こさなければならない。

Introduction

1. はじめに

このシナリオは“新クトゥルフ神話TRPG ルールブック（以下“ルールブック”）”に対応しており、探索者1人向けにデザインされている。プレイ時間は探索者の作成を含まず

に1～2時間程度だろう。

探索者はアーカム在住を想定している。〈オカルト〉や〈科学（天文学）〉に関心がある人物だと導入がスムーズだろう。

このシナリオはH. P. ラヴクラフトの「闇に囁くもの」より少しあとの時期を描いており、同作のテーマや内容を踏まえた構成となっている。キーパーはこのシナリオをプレイするに先立って「闇に囁くもの」に目を通しておくと、シナリオの背景とトーンをより理解しやすいだろう（“ルールブック”15ページ「キーパーへの注意」でも、初心者へのお勧めとして挙げられている素晴らしい作品だ）。

Keeper Information

2. キーパー向け情報

ヴァーモント州のダマーストンに住むアーヴィン・サンブソンは、この地に古くから潜むユゴスよりのものたちに協力する「同盟者」であった。病により余命わずかな彼は、親子でユゴスを旅するという夢をかなえるため、疎遠であった息子のエドワードを呼び戻す。ところが、彼の命はエドワードが戻った直後に尽きてしまう。

同盟者という父の裏の顔を知らないエドワードは、父がいまわの際に抱えていた奇妙な円盤の調査を友人である探索者に依頼する。しかし、それは地球上には存在しない、暗黒の惑星ユゴスで作られたアーティファクトであった。

円盤の調査によって、探索者はユゴスよりのものたちが地球の植民地化をもくろんでいることを知る。彼らは星間飛行に適さない同族を地球へ移住させるとともに、地球人のユゴスへの拉致を効率的に進めるため、2つの星をつなぐ時空の門を開こうとしているのだ。ユゴスよりのものたちは門を開く儀式と並行して、計画の秘密を守るべく探索者への妨害工作を始める。

NPCs

3. 主なNPC

エドワード・サンプソン

35歳。男性。アーカム在住。
探索者の友人で共通の興味も多い。科学や学問に基づく議論を好み、根拠のない迷信の類いは常に疑っている。

父の残した奇妙な円盤に興味を持ったことが災いし、ユゴスよりのものに目を付けられる。同盟者になることを拒否したことで催眠にかけられた彼は、時空の門を開く儀式への協力を強制されてしまう。そして彼が円盤の行方をしゃべったことで、探索者もまたユゴスよりのものたちから付け狙われることになる。



アーヴィン・サンプソン

68歳。男性。エドワードの父。もともと田舎には珍しくない迷信深い人物だったが、妻の早逝がその性質をいっそう悪化させた。家のそばにあるブラック・マウンテンを日々さまよい歩く中でユゴスよりのものと遭遇したアーヴィンは、その宇宙の知識と高度な科学力に魅了され、彼らの同盟者となった。エドワードと長年不仲であったことを悔やんでおり、和解して一緒に宇宙を旅することを夢見ている。

死後、彼の遺体はユゴスよりのものによってひそかに回収され、摘出された脳は脳収容器（“ルールブック”263ページ参照）に収められた。彼らの科学は、死後間もない者であれば脳を生かし続けることができるのだ。

ノイス

ユゴスよりのものに協力する、同盟者たちの代表格。当世風の身なりと小さな口ひげが特徴の、都会的な若い男。理知的で落ち着いた着きがあり、ボストンなまりでしゃべる。

脳収容器のアーヴィンと共にエドワードを同盟者に勧誘しようと試みる。しかしエドワードがこれを拒否したため、アーヴィンの意向を尊重し殺害にはいたらず、催眠をかける選択を取った。



ノイス、ユゴスよりのものの使者

STR 55 CON 40 SIZ 60 DEX 45 INT 65
APP 75 POW 45 EDU 70 耐久力 10

DB: +0 ビルド: 0 移動: 7

近接戦闘 (格闘) 30% (15/6)、ダメージ 1D3+DB
射撃 (22口径ショート・オートマチック) 40% (20/8)、
ダメージ 1D6

回避 22% (11/4)

装甲: なし

技能: 運転 (自動車) 35%、ヒプノーシス 30%、魅惑 45%

ユゴスよりのもの

太陽系第9惑星 (1930年当時) である冥王星 (ユゴス) に生息する生物 (“ルールブック”303~304ページ参照)。
彼らのうち宇宙空間を自由に移動できる種は、はるかな昔から地球でひそかに活動を行なってきた。特にヴァーモント州は多くの個体が潜伏する拠点となっている。そして今、彼らは地球の植民地化を本格化させようとしている。ユゴスと地球が半物質宇宙の空間法則上最も接近する周期が、1930年5月に巡って来るのだ。彼らはこの時期を逃さぬよう儀式を進め、ブラック・マウンテンの山頂に時空の門を開こうとしている。儀式が完遂し時空の門が開き切れば、ユゴスからさらに多くの同胞が地球に送り込まれると同時に、多くの人間がユゴスへと拉致されることになるだろう。

ユゴスよりのもの、ヴァーモントの怪物

STR 50 CON 50 SIZ 50 DEX 70 INT 65
POW 65 耐久力 10

DB: +0 ビルド: 0 移動: 7/飛行 9 MP: 13

1ラウンドの攻撃回数: 2 (かぎ爪)、または1 (捕まえる)

捕まえる 45% (22/9)

近接戦闘 45% (22/9)、ダメージ 1D6+DB

回避 35% (17/7)

装甲: なし。貫通する武器は可能な最小限のダメージしか与えない。

正気度喪失: ユゴスよりのものを見て失う正気度ポイントは0/1D6。

Get Starting

4. シナリオの導入

1930年5月上旬、探索者の家にエドワード・サンプソンが訪ねて来る。いつものように、近頃のニュースに関する意見交換や議論を楽しむためだ。

彼は手土産の高級タバコの箱を取り出して探索者に勧めると、今年3月に発見が報じられた太陽系第9惑星の話題を切り出す。この星が先日、ローマ神話における冥府の王にちなんで「冥王星 (プルート)」と命名されたのだ。これについて彼は、「プルートと言えば、彼は大地に裂け目を作って、春の女神プロセルピナを冥界に連れ去り妻としたんだ。そのために地上は常春ではなくなってしまった。もちろんこれは作り話だね」と笑い、「冥府の王の名を持つあの星は、地球に何をもたらすだろうか」と話す。

それから数日後、探索者のもとにエドワードから小包が届く。発送はアーカムの彼の家からではなく、ヴァーモント州のダマーストンからだ。中には1通の手紙 (プレイヤー資料1「エドワードの手紙」) と、金属製の円盤状の物品が入っている。

円盤は直径15cmほど、厚さ1cmほどで、とても軽い。黒

みを帯びた銀色をしているが、見る角度によっては僅かに虹色に輝く非常に珍しい金属で作られている。片方の表面には曲線的な模様や数字が彫り込まれ、こまごまとした複雑な凹凸や可動するパーツが見受けられる。〈オカルト〉か〈科学(天文学)〉の知識を持っているか〈知識〉ロールに成功した探索者は、この円盤がどこかアストロラーベ(古代から中世にかけて使われた、航海術や占星術などに用いる円盤状の天体観測機器)に似ているように思える。

Threats from Yuggoth

5. ユゴスよりの脅威

円盤が探索者の手に渡ったことはユゴスよりのものにとって予想外であった。円盤が示す情報によって自らの存在と計画の秘密が露呈することを危惧した彼らは、探索者を標的として動きだす。これらのイベントは、探索者が円

盤を受け取って以降の任意のタイミングで発生させること。ただし、すべてのイベントを発生させる必要はない。

スパイ

探索者は路地の角から黒ずくめの男が自分を見つめていることに気づく。男は探索者と目が合うと路地の奥に姿を隠す。探索者は〈隠密〉や〈追跡〉、DEXロールに成功することなどでこのスパイを捕らえることができる。捕まったスパイは「時空の門はすでに開き始めている。これ以上彼らのせんさくをするな」とか「地球は彼らの星とつながり、偉大な科学に満ちるのだ。おまえも彼らの同盟者となれ」などと吐き捨てる。そして男の眼が甲高い音を立てながら赤く発光する。よく見ればその眼は機械仕掛けの義眼なのだ。間もなく義眼は爆発し、男は脳漿をまき散らして絶命する。探索者は1D3ポイントの耐久力と1/1D4正気度ポイントを失う。

1930年5月〇日

親愛なる友へ――

僕は今、故郷であるヴァーモント州ウィンダム郡のダマーストンにいる。なぜ僕がこの田舎町に来たのかというと、先日、父から「大事な話がある」という手紙を受け取ったからだ。長らく疎遠にしていたが、年老いた父を無視するのも気が引けて、仕方なく会うことにしたんだ。

少し父について話そうと思う。母が亡くなったのは僕が幼い頃のことだが、その頃から父はヴァーモント州に伝わる奇妙な伝承に異常なほど執心するようになっていった。彼は家のすぐ側にそびえるブラック・マウンテンに潜む人ならざる存在について幾度となく語っていた。そのばかげた話に嫌気が差した僕は、何度も彼と口論を繰り返したものだ。夜ごと暗闇をじっと見つめ耳を澄ます父の姿は僕の心をいやにざわつかせたもので、家を出られる年齢になった僕はすぐにダマーストンを離れた。そして、それ以来彼とはほとんど会わずに過ごしてきた。

さて、話を戻そう。そうして僕が久方ぶりに家に戻ってみると、驚いたことに父はベッドでぐったりとしていて、まさに死の淵に立っているような状態だった。彼は僕の顔を見るなり消え入りそうな声で「一緒に行こう」とつぶやいて――残念ながら「どこへ」なのかは聞き取れなかった――間もなく息を引き取った。医者話では、持病の悪化が原因だということだ。正直僕は、父が最期に見せた父親らしい情に驚いていて、今になって彼のことをもう少し理解してみようかという気持ちになっているんだ。

君に送ったその金属の円盤は父が生前ずっと大切にしていたもので、死の間際にも胸に抱えていた。それはおそらく、彼が信じていた伝承と何らかの関係があるのだろうと僕は考えている。そこで君にお願いがある。この円盤が何に使われる道具なのか、調べてほしい。

このアイテムは君の興味を刺激するものだと僕は確信している。調査を引き受けてくれるなら、方法は君に一任するよ。博識な君なら何か思い当たることがあるかもしれないし、ミスカトニック大学の教授陣も力になってくれるだろう。僕は父の遺品整理のためここにしばらく滞在する必要があるから、お礼については後日会って相談しよう。

エドワード・サンプソン

追伸 電話がないので、連絡があれば手紙か電報で。

偽警官

探索者の家（または作業場）に警官が訪ねて来る。警官はアーカムのイーストタウンに住むグリーン氏の屋敷から、大変価値のある骨董品——「よくは知りませんが、円盤のようなものだそうで」——が盗まれたのだと話し、念のため家の中を調べさせてもらおうと言って上がり込もうとする。探索者は警官のこの対応があまりにも不自然だとわかる。警官は間取りを確認するようにジロジロと室内を見回し、円盤を見つければそれを押収しようとする。探索者がこれに抗議すれば、警官はおとなしく帰っていく。

あとで調べれば、この警官を名乗った男がアーカム警察には在籍していないことも、グリーン氏の屋敷から盗まれた物などないこともわかる。もし男を尾行するなら、アーカムの西の森の暗がりでごつぜんと姿を消す。

操り人形

夜、眠っている探索者がふと目を覚ますと、金縛りにあったように体の自由が利かなくなっている。〈聞き耳〉に成功すれば、家の外から複数の人物が聞き慣れない言語で何かをつぶやく声が聞こえてくる。探索者の体はひとりでに立ち上がって手近な刃物を手に取り、それをのど元に近づける。探索者はPOWロールを行ない、成功すれば体の自由を取り戻すことができる。失敗すれば体の別の場所を傷つけることで何とか自由を取り戻し、1D2の耐久力を失う。この不可解な体験をした探索者は0/1D3正気度ポイントを失う。

家の外を確認しても声の主はすでにいなくなっているが、家の周囲に複数の足跡を発見できる。

ダマーstonからの電報

これは探索者がエドワードに手紙が電報を送った際の反応に適している。

探索者のもとに1通の電報が届く（プレイヤー資料2「電報」）。探索者はこの文面がエドワードにしては素っ気ないものだと感じるだろう。

この電報は催眠状態にあるエドワードの現状を悟られないように、彼を装ってノイズが送ったものだ。探索者がダマーstonの郵便局に確認を取れば、この電報を送った人物の特徴がエドワードと一致しないことがわかる。

ノイズの手紙

この出来事は探索者がほかのイベントをいくつか経験したあとに発生させるとよいだろう。

探索者のもとにダマーstonの郵便局から送られた手紙が1通届く（プレイヤー資料3「ノイズの手紙」）。

Investigation

6. 円盤に関する調査

円盤に関する調査を行なう際、探索者は専門家に調査を依頼してもよいし、自分の知識（技能）を生かしてもよい。

専門家を頼る場合、技能ロールは不要だが、結果を得るまで1日～数日程度の時間がかかる（彼らはほかにも仕事を抱えているからだ）。その間、探索者はより多くの妨害行為



「シバラクタボウ オツテレンラクスル」
エドワード

（深淵の星 プレイヤー資料2「電報」）

（「5. ユゴスよりの脅威」参照）を受けることになる。

知識を生かす場合はもっと短い時間で結果を得ることができる。該当する技能ロール（下記参照）を行ない、成功すれば情報が得られるし、失敗すればその調査は専門家でなければ難しいものなのだとすぐにわかる。

ユゴスとの通信

これは探索者が円盤を受け取った直後に起きる。

探索者は円盤が近くにあるときにラジオがノイズを拾うことに気づく。INTロールに成功すれば、円盤が何らかのエネルギー波を受信していることがわかる。また、〈科学（工学）〉〈機械修理〉〈電気修理〉などに成功するか、工学が通信の専門家に調査を依頼することで、このエネルギー波が冥王星の存在する方向から発信されていることがわかる。

用途について

円盤の外観やアストロラーベとの類似に注目したなら、〈科学（天文学）〉〈歴史〉などに成功するか、それらの専門家に調査を依頼することで以下のことがわかる。

■ この円盤は地球と冥王星のみに焦点を当てた、極めて特殊なアストロラーベの一種のようだ。冥王星は発見され

ダマーストン、ヴァーモント州
1930年5月△日

初めまして、(探索者)さま——

私はわれわれの特別な友人たちの代理人を務める者です。このところ、円盤を巡って貴殿と私ともの間にすれ違いが生じてしまっていることに関し、心よりお詫び申し上げます。どうやら双方の間で多少の誤解があったようです。

私どもは同士アーヴィン・サンブソン——エドワード君のお父上です——が友人たちから受け取ったその円盤が、誤って失われてしまうのではないかと憂慮しておりました。本当に、それだけが私どもの懸念でした。しかし、貴殿が知性と良識を兼ね備えた心ある方であるとわかりましたので、もうその心配はなくなりました。なお、エドワード君からも貴殿の人柄についてうかがっております——彼も今やお父上と同じく、われわれの同士となったのです。

また、友人たちに害意はありません。ただ、彼らはその出自ゆえに存在が公に知られることを避けているため、やや警戒心が強いだけにすぎません。むしろ、彼らはわれわれとの交流を望んでおります。特に貴殿のように聡明な方とならなれどです。現在、彼らはわれわれとの関係をより深いものになしうと懸命に努めているところでもあります。

私どもはいたしましては、貴殿を新たな同士として迎え入れる準備が整っております。貴殿がその意志をお持ちでしたら、その証として円盤をダマーストンのサンブソン宅までご返送ください。同士として貴殿をお迎えできる日を、心よりお待ちしております。

——ノイス

(深淵の星 プレイヤー資料3「ノイスの手紙」)

たばかりの天体であり、このような精巧な機器をこの短期間で作れるとは思えない。使用されている金属も特殊なものようで、調べれば何かわかりそうだ。

- 通常のアストロラーベには存在しないパーツがいくつもあり、目盛りが何を意味するのかも不明ながら、1930年5月に「何らかの周期」が数百年ぶりに巡って来るようだ。

素材、作製年代について

円盤の素材や作製年代に注目したなら、〈科学（物理学）〉〈鑑定〉などに成功するか、物理学の専門家に調査を依頼することで以下のことがわかる。

- 円盤の素材には地球上に存在しない未知の金属が使用されている。非常に硬く、現代の技術では加工することも破壊することもできない。
- 正確な年代は特定できないものの、数百年前かそれ以上

前に作られたと推測できる。しかし、製作には現代でも模倣が困難なほど極めて高度な技術が用いられている。

- 表面に非常に強い宇宙線の影響が見られる。これは地球環境では説明のつかないものであり、太陽系の外縁のような宇宙線を受けやすい環境に長期間さらされていた可能性を示している。

伝承について

円盤が地球外の技術で作られた可能性や、ヴァーモント州の伝承、ブラック・マウンテンに注目し調べるなら、それらにまつわる情報を見つけることができる。その際、〈オカルト〉〈科学（人類学）〉〈図書館〉などに成功すれば短い時間で成果を得られる。失敗しても、1日程度の時間はかかるが同じ成果を得られる。または人類学の専門家に情報収集を依頼してもよいだろう。

- 1927年11月に起きたヴァーモント大洪水の直後、氾濫した川に浮かぶ奇怪な生物——1.5mほどもある、翼のある甲殻類めいた姿——の目撃情報がいくつも挙がった。これをきっかけに、ヴァーモント州に伝わる「人里離れた山の木々の中や暗い谷間に怪物じみた生物が隠れ潜んでいる」という、今ではほとんど忘れられた民間伝承が老人たちの記憶から呼び覚まされた。怪物の存在の是非を巡る論争は『アーカム・アドヴァタイザー』紙に投書の形で掲載され、ミスカトニック大学文学講師で民間伝承の研究家のアルバート N. ウィルマースが、件の古い伝承が作用してこの「見間違い」を引き起こしたのだと主張した。また、彼はそもそもこの伝承自体がさらに古いインディアンのお話——地球外から飛来した生物にまつわる伝説——に影響されたものでしかなく、それさえも人類に共通する自然を擬人化した普遍的な伝説と変わらないと述べている。しかし翌年5月に入ると突然ウィルマースは反論の延期を繰り返すなどの不自然な消極性を見せ、この公開討論は自然と消滅していった。

- ブラック・マウンテンの名はこの土地のインディアンの伝説に由来する。大昔のブラック・マウンテンは全体が黒い岩で覆われた漆黒の山だったが、空からやって来た「翼をもつもの」が山に棲み着き、岩を空へ持ち去ったことで今の状態になったのだと言う。また、インディアンは翼をもつものと交流して珍しい道具や知恵を手に入れることもあったと言い、いつの日か大勢の翼をもつものがブラック・マウンテンに現れ、大いなる英知を授かる時が来るのだと言い伝えられていたようだ。

- 最近の『アーカム・アドヴァタイザー』にこのような短い記事がある。とあるアマチュア研究者がヴァーモント州でインディアンの遺物の発掘調査を行なった際、ブラック・マウンテンの山頂を不可解な灰色の霧が覆っているのを目撃したのだという。周辺住民は山に棲むとうわさされる怪物的存在との関連を懸念しており、これを受けて『アーカム・アドヴァタイザー』はウィルマースに公開討論の再開を呼びかけている。

Miskatonic University

7. ミスカトニック大学

探索者が自分には専門知識を求めるなら、ミスカトニック大学以上にふさわしい場所はないだろう。調査の助けになりそうな学科はひとつもあり、オフィスを訪ねて事情を話せば、教授たちは依頼を引き受けてくれる。

探索者が象形文字（後述）を解読できる人物を探しているなら、図書館長のアーミテッジが適任だと紹介される。

アルバート N. ウィルマース

探索者はウィルマースの小さなオフィスを訪ねることで彼に会うことができる。ウィルマースは神経質さみで小柄な50代の男で、警戒しながら探索者に応じる。彼はユゴスよりのものをひどく恐れ、おびえているのだ。そのため、探索者がヴァーモント州への同行を頼むようなことがあれば、彼の体は震えてまともに動かなくなる。

探索者がヴァーモント州の怪物や公開討論について尋ねるなら、彼は身震いしながらいつまんだ内容を話す。

「私はあの公開討論で、ヴァーモント州の田舎に住むエイクリーという男と手紙を通じて知り合った。彼は怪物の存在を主張し、その証拠として足跡の写真や、奇怪な声を録音したろう管のレコードを私に送ってきた。それらはとても偽物とは思えないもので、私はしだいにエイクリーの主張が真実ではないかと考えるようになった。そこで彼と相談し、世間の興味をあの恐ろしい存在からそらすために公開討論を中止することに決めたのだ。エイクリーは日々怪物に脅かされていたようで、私は彼の身を案じていた。しかし、ある時彼は突然怪物に対する態度を軟化させ、「もう安全だ」と言って私を自宅に招待してきたのだ。それで私はヴァーモント州へ向かったのだが、その結果……私はそこで怪物の存在を確信することになった。すまないが、その詳細を話す気にはなれない。まだ気持ちの整理がついていないのだ」

「やつらは暗黒の惑星ユゴスから地球に渡って来た存在だ。その星は海王星の向こう、太陽系の9番目の位置にあるのだと言う。そう、あの冥王星こそが、やつらの棲みかたるユゴスにほかならないのだ!」

ウィルマースが話に出した手紙や証拠品は、今ではすべて失われてしまっている。また、エイクリーに関しては「彼はもういない」とだけ言って、それ以上は語らない。

探索者がウィルマースから円盤についての情報を聞き出すには、円盤と冥王星の関連を示す必要がある。そうすればウィルマースは以下の内容を思い出して話す。

「エイクリーは、はるか昔から一部の人間と怪物たちとの間に同盟関係が結ばれてきたのだと記していた。そのような同盟者を捕らえて、さまざまな話を聞き出したのだそう。それによると、やつらは地球への干渉をさらに強めようとしていて、地球とユゴスが何らかの法則によって近づく時期に、2つの星をつなぐ門を開こうとしているというのだ」

「門を開くためには、地球とユゴスの双方向からの思念の交差が必要で、それを受信する円盤状の装置がそれぞれの

星に存在するという。もしユゴスから送られて来る思念波の受信装置がその円盤であるなら、それが地球上に存在するかぎり門への効果を及ぼし続けるだろう。ただちに破壊するか、地球外へ放り出してしまうべきだ。そうすればユゴスからの思念波は地球に届かなくなり、門は完成しなくなるはずだ」

「かつてヴァーモント州に住んでいた一部のインディアンは、翼をもつものから恩恵を受けていた。もしその正体があの怪物なら……。インディアンたちは瞑想によって宇宙の真理とのつながりを持ったとされるが、それもまた、あの怪物の思念を受け取る行為だったのではないかとすれば、彼らをまねることで円盤を介して怪物の思念をつかみ、そこから何か手掛かりを得られるかもしれない。彼らはタバコやホワイトセージなどを聖なる植物と見なして、それらをいぶした煙を振りかけて体を清めることで、儀式や瞑想での霊的な感受性を高めていたという。確証のない思い付きだが、おそらく試す価値はあるだろう」

Recognition

8. 認識

探索者がウィルマースの語った方法で瞑想を行なうと、円盤の受信する思念波が探索者の脳に波及し、特定のイメージを呼び起こす（プレイヤー資料4「ユゴスの光景」）。探索者は1/1D4正気度ポイントを失う。

このイメージを幻視した探索者はINTロールを行なう。成功すれば、地球とユゴスをつなぐ門がすでに開きつあることに気づき、この門を逆に利用することで円盤を地球外に放出できるのだと思いついた。

この解決方法を導き出せなかったプレイヤーが〈アイデア〉ロールを要求した場合、ハードの〈アイデア〉ロールを行なう。ロールに失敗した探索者は、手掛かりを得る代わりに新たなイメージが脳に湧き起こる。あの暗黒のユゴス

奇怪な古木が立ち並び、息の詰まる霧で灰色にかすんだ、暗いくぼ地がある。黒々とした岩を積み上げた忌まわしくいびつな塔からは、けがれた煙が立ち昇っている。辺りには不伏な振動音を発する無数の影が揺れており、それらは巨大な甲殻類じみた輪郭をしている。目の前には禍々しい印が刻まれた黒い石の祭壇があり、その上には生け贅が功なく横たわっている。はるかかなたにある太陽が、ここがどこなのかを教えている。つい最近発見されたばかりの星。ユゴス、それがこの星の名だったはずだ。

空の一点には空間を引き裂く亀裂があり、その向こうにのぞく青い空へと、この星の灰色の霧が漏れ出している。あの裂け目は地球とつながっているのだ。——そのとき、生け贅が死の底からの叫び声を上げた。だが、祭壇に横たわるその人物は、紛れもない自分自身であった。

(深淵の星 プレイヤー資料4「ユゴスの光景」)

のさらにはるかかなたの深淵、七つの太陽が燃える死の世界で、四方から迫る闇が探索者をもみ込んでいく。そして、ヴァーモントの怪物どもが崇拜する、知覚することもまなぬ大いなる存在が、探索者の果敢な戦いをあざけり笑う声がこだまするのだ。探索者は1/1D6正気度ポイントを失う。

象形文字

探索者がユゴスのイメージを幻視した直後から、円盤は裏面に謎の象形文字の文章を徐々に浮かび上がらせていく。この象形文字の意味を知るためには、極めて専門的な知識が必要となることは明らかだ。

〈オカルト〉の知識を持つ探索者は、この象形文字を解くヒントが、かつて詩人アブドゥル・アルハザードが著したという、身の毛もよだつ書物『ネクロノミコン』に隠されているのではないかと思いいたる。『ネクロノミコン』のラテン語版は、ミスカトニック大学附属のオーン図書館に所蔵されており、館長のヘンリー・アーミテッジはオカルト書物や暗号学に精通している人物だったはずだ。

Orne Library

9. オーン図書館

オーン図書館が誇る『ネクロノミコン』を含むオカルト書籍コレクションは、現在アーミテッジの意向で特別制限図書として保管庫に収められており、閲覧は許可されていない。アーミテッジは1928年にアーカムの西にあるダニッチで起きた事件（いわゆる「ダニッチの怪」）に関わったことで、この世ならざる存在や魔術への危機感、そして人がそれらに関する知識を持つことへの警戒心を強めているのだ。そのため、彼はウィルマースが語った恐ろしい経験も事実として重く受け止めている。

アーミテッジに会いに来た探索者が司書に要件を伝えれば、3階にある彼のオフィスへと案内される。人好きのする眼鏡の老図書館長アーミテッジは、探索者を見ると読んでいた本を閉じ、やや重い足取りで安楽いすに腰を下ろす。彼は「少し前から心臓を悪くしておりますな」（ダニッチの怪が原因だ）と笑って、探索者の要件を注意深く聞く。

探索者が単にウィルマースから聞いた体験談を話すなら、アーミテッジは「潜在意識が悪さをした妄想ですな、疲労が原因でしょう」とはぐらかす。

しかし、探索者の持ち込んだ要件が冥王星に関わるものであるとわかれれば、彼はとたんに表情を陰しくする。そして、探索者に忍び寄る存在にしてヴァーモント州の伝承で語られる怪物こそは、冥王星、すなわち暗黒の惑星ユゴスから飛来した忌まわしき種族で間違いないであろうと打ち明ける。

探索者が円盤の象形文字を見せれば、アーミテッジはそれが『ネクロノミコン』に書かれた象形文字といくらに類似しているため、自分なら解読が可能だろうと請け合う。

加えて彼は「円盤が心配であれば側にいていただいても構いませんぞ。むしろ、この円盤がユゴスから来た存在と関連する物ならば、そうなるのがよいでしょうな。その

ほうが私も安心して解読に集中できますので」と提案する。

真夜中の侵入者

アーミテッジが解読を進め、やがて図書館が閉館すると、月には雲がかかり光のほとんど届かない闇夜が訪れる。そんな中、不意に図書館全体の明かりが一斉に消える。

探索者は周囲の空気が不快に振動していることに気づく。さらに、体に吹きつける風が、開けたはずのない窓が開いていることを知らせる。不意に室内から「計画に近づくな、人間」と声が発せられる。それは虫の羽音のような不快な音で、人間の声をまねてはいるが、そこには人間味らしきものがまるで感じられない。

直後、アーミテッジの悲鳴が上がり、探索者は頼りない月明かりが浮かび上がらせる、侵入者のおぼろな輪郭を垣間見る。先端がはさみ状に分かれた何対もの脚が甲殻類めいた胴体に並び、楕円形の頭部はおぞましい短い触毛に覆われている。その悪魔じみた異形の姿が、膜状の翼の羽ばたきによって幽体めいて空中を浮遊している。ユゴスよりのものと遭遇した探索者は0/1D6正気度ポイントを失う。

ユゴスよりのものは探索者に襲いかかる。攻撃が成功した場合、狭い室内では器用な飛行ができずもみ合いとなり、探索者は壁にたたきつけられ1D3ポイントのダメージを受ける。この戦闘は1ラウンドで切り上げてよい。すぐに夜警と番犬が駆けつける声が聞こえ、ユゴスよりのものは窓から撤退する。

アーミテッジと円盤は無事だ。アーミテッジはランプに火をつけると、青ざめた顔で「どうやら電線が切断されたようです。やはりあなたにいていただいで正解でしたな、一刻も早く解読を終えねば」と言って、作業を急ぐ。

この夜に探索者がアーミテッジのオフィスにいなかった場合、円盤はユゴスよりのものに奪われる。襲われたアーミテッジは夜警と番犬の奮闘で大けがを負うにとどまり、大学の聖メアリ医学部附属病院に運ばれる。

解読

翌朝、アーミテッジが象形文字の解読を完了し、その意味が判明する（プレイヤー資料5「解読された象形文字」）。

アーミテッジはこの内容に危機感をあらわにしつつ、胸を押さえて苦渋の表情を見せる。彼は心臓への負担がすでに大きく、これ以上自分が調査へ関与するのは難しいと話す。そして、探索者の安全を祈り医務室に向かう。

夜の間にアーミテッジが病院に運ばれている場合、探索者は彼の病室を訪れることで、ことの経緯と解読の結果を聞くことができる。

Attacked

10. 襲撃

これは探索者がいつまでもアーカムにとどまり続けるか、円盤の調査を放棄した場合に起きることだ。

ユゴスよりのものは計画の秘密に近づいた者を放っておかない。月が欠けて闇が濃くなる夜、探索者の居場所は1体のユゴスよりのものと2人の同盟者に囲まれる。探索者は彼らが近づく足音に気づくだろう。

新たな植民の星を見定めよ。か黒き山が根城となり、
数多の同胞はびこらむ。神への賛美を深淵にささげ、
星をつなぐる門を開け。

(深淵の星 プレイヤー資料5「解読された象形文字」)

敵は窓か玄関ドアを破壊して侵入を試みる。場所が街中
の場合、同盟者は目立つことを避けるために棍棒での攻撃
を仕掛けるが、いざとなればライフルを使用する。

探索者がこれを退けたとしても、また同じように闇の濃
い夜に敵はやって来る。これは探索者が死ぬか別の場所へ
逃げるか、あるいはダマーストンへ向かうまで続く。そし
てその度に敵の数は少しずつ増えていく。探索者が警察に
警護を頼むなら、敵は狡猾にもその間は襲撃を控える。

同盟者

STR 60 CON 55 SIZ 50 DEX 25 INT 35
POW 60 耐久力 10

DB: +0 ビルド: 0 移動: 8

近接戦闘 (格闘) 35% (17/7)、ダメージ 1D6+DB (棍
棒)

射撃 (30口径レバー・アクション・カービン) 40% (20/8)、
ダメージ 2D6

回避 12% (6/2)

装甲: なし



Dummerston

11. ダマーストン

アーカムからダマーストンへは車で約5時間。または、ボ
ストン&メイン鉄道をプラトルボロで降りたのちバスで北
に向かえば到着する。

コネカット川の清流沿いに位置するダマーストンは、
うっそうとした森林と険しい丘陵地が広がり、その中に小
さな農場と古びた民家が点在している。この土地には、近
代的なアーカムとは違う、いにしえの時代の秘密を今日ま
で継承し続けているかのような重たい雰囲気が漂っている。

町の南側には標高約400m弱のブラック・マウンテンがそ
びえ、その山頂には灰色の霧がかかっている。

住民たちは皆多少なりとも伝承を信じる純朴な人々で、
例の奇怪な生物がブラック・マウンテンで目撃されたとい
う噂のせいで彼らの間には不安がはびこっている。また、
最近になって町から姿を消した人も複数おり、何かがおか
しいという空気が町全体を包んでいる。山頂の霧は数日前
から出始めたもので、彼らはそこにいる何かを刺激するこ
とを恐れて家にこもり、郡保安官への通報すらためらっ
ている。

住民たちはアーヴィン・サンプソンとの交流を絶って久
しい。サンプソンの地所には夜になると不気味な生物が現
れるとうわさされており、誰もがその場所を避けているのだ。

敵から身を隠す

探索者は〈隠密〉〈変装〉の、いずれかのイクスト
リームに成功することで、敵から身を隠すことがで
きる。だが、探索者がいつまでもそう続けるなら、
それはユゴスよりのものの計画が成し遂げられるこ
とを意味する。その結果、時空の門が開かれたブラッ
ク・マウンテンには数多くの異形の者たちがユゴス
から訪れ、山は彼らの要塞となる。彼らは世界中に
広がり、地球の支配を影から進めていくのだ。そし
て数日後、次のようなニュースが探索者の目に留まる。
「5月のある日、ブラック・マウンテンの山頂から
おびただしい数の飛行生物が飛び去って行った。一
つとして正常な生物の姿をしていなかったが、その
中にヒマラヤの雪男ミ=ゴをほうふつとさせる獣じ
みた生物の姿もあった」

このニュースを知った探索者は1/1D6正気度ポ
イントを失う。その後、エドワードが失踪したこと
を知ったなら、さらに0/1D6正気度ポイントを失う。

サンプソン宅

丘陵と森林の間を伸びる道を進めば、ブラック・マウンテンの東の麓にサンプソン宅がぼつりと存在している。辺りはいやに静かで、人けや動物の気配は感じられない。

家に続く小道にはいくつかの足跡に混ざって、明らかに人間のものではないさみ状の奇怪な足跡が残っている。これを見た探索者は0/1D4正気度ポイントを失う。

家の中には誰もいない。部屋の隅にはサンプソンというラベルの貼られた、高さ30cmで直径はそれよりも少し小さい金属製の円筒が置かれている。円筒はスピーカーを思わせる奇妙な付属機械とコードで接続されている。付属機械にはダイヤルが存在し、回せば機械が作動しそうだ。

ダイヤルを回すと、機械的だが実に正確な発音の音が付属機械から発せられる。「やあ！ 儀式は成功したのですかな？ 時空の門が無事に開かれたんでしょうな。ぜひ詳しくお聞かせ願いたい！ さあ、残りの装置も接続して、わたしに目と耳をください！」

円筒のそばにはさらに2種類の機械があり、それぞれ円筒と接続できそうだ。

残りの装置を接続しダイヤルを回せば、スピーカー風の付属機械は「おや、貴方とは初めてお会いしますな。わたしはアーヴィン・サンプソンと申す者。今はこのように脳みそだけの姿ですが、貴方と同じくユゴスの友人たちの同盟者なのです。ところで彼らとノイスさんはどこに？」と話す。これ聞いた探索者は0/1D3正気度ポイントを失う。

この円筒はアーヴィンの脳を納めた脳収容器だ。彼は探索者を同盟者の仲間だと勘違いしているため、探索者がうまく同盟者を装えば、彼は調子よく知っていることを話す。だが、身分が疑わしくなるようこと（ユゴスよりのものについてや、時空の門の閉じ方など）を探索者が尋ねるようなことがあれば、勘違いに気づき口をつぐむ。

■ **エドワードについて：**「せがれは友人たちと一緒におります。残念ながら彼らの素晴らしさをわかってくれず協力的ではないため、今はやむなく催眠状態にあります。わたしはこれまでせがれとはうまくいっていませんでしたが、今後はせがれが友人たちに抱くあらぬ誤解を解き、彼らの案内で親子仲良くユゴスや宇宙を旅したいとおっております」

■ **計画、儀式について：**「友人たちがここにいないということは、今まさに山頂で儀式が行なわれておるはず。門が開けば、宇宙を渡れない大勢の友人たちもユゴスから地球に来ることができるのです。人類はより多くの知識と科学の恩恵を彼らから受けることができるのですぞ！」

■ **アーヴィン自身について：**「実はわたしは一度死んだのですが、情け深い友人たちが脳みそを取り出してこの機械に入れてくれたおかげで、まだこうして生きております。宇宙を旅するにはこの姿でなければいけないゆえ、もとより、いずれこうしてもらおうと思っておったのですよ」

ブラック・マウンテン

ブラック・マウンテンにはほとんど手つかずの自然が残っている。登山道のない斜面を登っていくことになるが、サンプソン宅のある東側の丘陵地から登れば、頂上までの距

離はそれほど長くない。山は上へと登るにつれてしだいに霧が濃くなり、山下の景色は見えなくなる。

頂上にたどり着くと、そこでは灰色の霧を放出する超自然の裂け目が地面に発生している。その周りに配置されたいびつな岩の環状列石の外側で、2体の怪物と2人の人物——エドワードとノイス——が謎めいた文言を唱えている。

「かなたの深淵なるアザトース、ユゴスがその末子なりし。このか黒き山に門を開き、われらに歓喜をもたらすダイモンよ。いあ！ にやるらとてつぶ！」

この恐るべき儀式を目撃した探索者は1/1D6正気度ポイントを失う（「恐ろしさに慣れる」のルールを適用する）。

地面に開いた裂け目は、暗黒のユゴスへとつながる時空の門だ。この門を閉じるには、円盤を門の中へ投げ込み、円盤が地球上に存在しない状態にしなければならない。

ここに来るまでに円盤が探索者の手を離れていた場合、円盤はノイスの手に握られている。

エドワードはうつろな目で抑場のない言葉を発しており、頭には見慣れない金属の環が取り付けられている。彼の催眠状態はこの環によって維持されているため、これを取り外すことで催眠を解くことができる。戦闘ラウンド中に環を取り外すには1回のアクションが必要だが、その際にダイス・ロールは必要ない。催眠状態の彼は戦闘には参加せず、淡々と詠唱を続ける。また、戦闘中に催眠が解けた場合も、彼はユゴスよりのもののおびえて動けなくなる。

遠くから円盤を時空の門に投げ込むには〈投擲〉、近づいて放り込むには〈隠密〉や〈近接戦闘〉、DEXロールなどが考えられる。キーパーはプレイヤーの提案を柔軟に採用するとよい。また、山頂は霧で視界が悪いため、目立つ行動を取らなければ敵に気づかれることはない。状況に応じて探索者の行動にボーナス・ダイスを与えるとよいだろう。

姿を現した探索者が攻撃的でなければ、敵は話し合いを望む。主にノイスが「彼らは友好的な種族であり、人類を宇宙の真理へと導いてくれるのです」などと穏やかに語り、ユゴスよりのものは不快な音でそれを肯定する。

探索者が敵をすべて倒した場合、数分後に別のユゴスよりのものたちが儀式を引き継ぎにやって来る。敵に見つかった探索者が一度引き返してから再び山を登るなら、敵の警戒度は当初よりも高いものになっているだろう。

崩落

円盤を時空の門の中に投げ込むと、思念波の交差が乱れたことで門は制御不能に陥る。門からあふれ出した闇が上空を覆い、山全体が揺れ始める。ユゴスよりのものとノイスは門を制御するために、探索者に目もくれず儀式の続行に全精神力を注ぐ。

すぐに大きな地震が起きて山の崩落が近いことを知らせる。急ぎエドワードを連れて下山しなければならない。探索者は速やかな下山のために、ハードの〈サバイバル（山）〉〈登攀〉〈ナビゲート〉、イクストリームのDEXのいずれかをロールする。

ロールに成功すれば、探索者が下山した直後に山頂から東側にかけての斜面が崩落し、土砂が滑り落ちる。探索者はこれを逃れることができるが、サンプソン宅は完全に土



砂にのみ込まれる。

ロールに失敗すれば下山間際に崩落が始まり、探索者はあと一步のところで土砂に巻き込まれて気を失う。そして重傷を負い、後日病院のベッドで目を覚ました時には、ユゴスよりのものに関する持ち物はすべて失われている。

Conclusion 12. 結末

探索者が儀式の完遂を阻止したなら、やがて時空の門は閉じ、山は沈黙して山頂の霧も晴れる。エドワードは探索者に心からの感謝と巻き込んでしまったことへの謝罪を述べる。彼は催眠の前後の記憶はあいまいで、脳容器のアーヴィンのことも、幸いほとんど覚えてはいない。ただ、なぜだか忌まわしい感情を湧き立たせるあの家が土の下に埋まったのは喜ばしいことだと話す。

これ以降、探索者を付け狙う者はいなくなる。探索者は自らと友人に迫る魔の手を退け、人類を脅かす恐るべき計画を止めることができたのだ。探索者は1D6正気度ポイントを獲得する。

しかしその後、土砂やブラック・マウンテンの中から怪物の存在を証明するものは何一つ見つからない。すべては妄想だったのか、それとも痕跡を隠滅した者がいるのだろうか。もしヴァーモントの地にあの怪物とその手先がまだ潜んでいるのだとしたら、本当の意味で危機を脱することができたと言えるのだろうか。そんなことが頭をよぎる。

冥府の神の名を持つ星は、太陽系のかなたから今も静か



「善は急げ」

探索者が行動派だったなら、十分な情報を得る前にすぐさまダマーストンに向かうこともあるだろう。その場合、シナリオはより迅速かつ危険なものとなる。

探索者がまだユゴスのイメージ（プレイヤー資料4「ユゴスの光景」）を幻視していないなら、ブラック・マウンテンを目にした際にこのイメージが脳裏に浮かぶ。その後のINTロールは行なわない。〈アイデア〉ロールで得られる手掛かりは、山頂で何かが待っているという漠然とした予感めいたものになる。

事態の解決方法は、エドワードを催眠から解放した際に知ることができる。彼はノイスらから聞いた話のかすかな記憶を思い出し、円盤を門に投げ込めばよいのだと話す。だが、これを行なうには敵との戦闘は避けられないだろう。

に地球を見つめ続けている。人類が彼の星を見つけるそのはるか前から、ずっと。